

万葉集における仁徳皇后の歌

2020、3、 太田蓉子

「万葉集」は、7、8世紀、飛鳥・藤原・奈良時代中期までの歌を収集していますが、この万葉時代を遡った前代の天皇たちが詠んだ歌として、唐突に、仁徳天皇の皇后二人、雄略天皇、聖徳太子、この三時代の人物の歌が収められています。万葉時代の人々が、過去を振り返り、それぞれに画期的な国家の変革期であったと感じ、それ故、歌に残して掲げたものかと思われま

す。仁徳天皇の時代については、”「日本国家」の夜明け”と認識していたのかと思います。今回、皇后が詠んだとして掲げる歌について考えて見ました。

4、5世紀(古墳時代)のヤマト政権は、畿内の有力豪族による連合体制であり、大王(天皇) (「天皇」「日本国」と呼ぶのは7C末以降であるが)を頂点とする一政権による全国統一は、まだ成されていません。軍事力の基盤となる鉄器の原材料は、専ら輸入に頼ります。そのため、百済国と同盟を結び、朝鮮半島へ出兵しています。中国に対しては、大王は、南朝鮮と倭国統治の地位の保証を請うています(5世紀の中国「宋書」による)。5世紀初頭の大王と見られる仁徳天皇(16代)は、こうした対外政策を重視してのことか、王宮を難波の高津(大阪市中央区高津)に設けていました。

(この時期、前方後円墳が巨大化するのも、外国に対する示威のためと言われる。)

皇后・磐(之)姫(いわのひめのおおきさき)は、ヤマトで一番の豪族の長であり外交を担った葛城襲津彦(つひこの娘)です。葛城高岡宮(注)で育ったとされます。天皇家の血縁でない氏族出身の皇后としては、初めての女性です。実家・葛城氏の後ろ盾が強大であったことが分かります。そして、後の皇后・八田皇女(やたのひめみこ)は、仁徳天皇の異母の妹で、父親は、先帝・15代応神天皇です。王家の血脈を守るために、八田皇女を妃ひきさきにするべきと、一族は考えていたでしょう。八田皇女の実兄も、是非とも妹を妃にしてほしいと、仁徳天皇に頼んでいました。しかし次の代の天皇には、磐姫が生んだ息子たちが即位しています(17代履中天皇、18代反正天皇、19代允恭天皇)。(「日本書紀」より)

(注)葛城氏の本拠地は、大和盆地の西側に並ぶ山々、南から金剛山・葛城山・二上山・信貴山に至る山並みの東麓一帯。葛城山に近い現在の御所市・森脇に高岡宮があったとされる。

(ここは、2代・綏靖天皇の宮があったとされる場所でもある。)

御所市に散在する古墳群は5世紀前半の築造で、仁徳天皇時代と合致し、当時の葛城氏の隆盛を物語る(写真)。

この「仁徳天皇と皇后の物語」は、伝説として古くから語り継がれて記述も存在したと見られます。万葉時代初期の宮廷では、既によく知られていたようです。この時期から編纂が始まった「古事記」と「日本書紀」は、かなり詳しく「物語」

を書き残しています。凡そ以下のようなものです。

「磐姫(磐之媛)は、大変嫉妬深い女性であったとされ、仁徳帝が宮に入れようとした女性達をいじめて追い返したり、女性関係の噂を聞くと“足をバタつかせて”嫉妬した、と言われます。十年後、仁徳帝はとうとう“八田皇女を召し入れて妃としたい”と切り出します。しかし、磐姫は聞き入れません。帝は、歌を詠み何度も懇願しますが、頑として許しません。数年後、磐姫が祭祀用の柏の木を採りに紀ノ国に出掛けた留守中に、帝は、とうとう八田皇女を宮中に入れました。難波の津に帰り着いて、その話を聞いた磐姫は、怒り、怨んで、柏の木を悉く捨てたうえ、船を下りずそのまま出航させます。そして、淀川を遡り、木津川へ入り、山城から平城なら山を越えて故郷ヤマトへ戻りますが、再び平城山を越えて、葛城氏の勢力地である山城の筒城岡つつきのおか(注1)に宮を造って籠ります。仁徳帝は歌を詠み迎えの者を行かせ、その後、自身も迎えに行きますが、磐姫は“八田皇女と並んで后でいたいとは思いません”と言って会おうとしません。その後も難波宮に戻ることはありませんでした。5年後、磐姫は、筒城宮で亡くなりました。仁徳帝は、平城山に陵墓(注2)を造って葬りました。その2年後、八田皇女は宮中に入り皇后になりました。」

注1 **筒城岡**は、**山城**(山背、山代)の南部、現在の京田辺市の多々羅付近。

ここには、6世紀初頭に26代**継体天皇**の**筒城宮**があったことで知られる。

(葛城氏一派が、越前出身の継体天皇のヤマト入りを支援した関係と言う。)

注2 磐姫皇后の陵墓は、**平城山**(奈良山)南の**佐紀**の地、奈良市佐紀町にある**ヒシアゲ古墳**に指定されている。また、直ぐ南隣の**ウワナベ古墳**は、**八田皇女の墓**とされ、どちらの墳墓も、5世紀中期築造の前方後円墳であり、**佐紀古墳群の東群**にある。しかし、万葉の人々は、これらを**磐姫らの墳墓**とは考えていなかったと見え、平城遷都後、古墳群を松林苑庭園の一部として利用している(榎原考古学研究所等の発掘調査)。尚、**仁徳**、**履中**、**反正**の天皇陵古墳は、**堺市・百舌鳥古墳群**に並んで指定されている。



宮内庁陵墓課・加藤氏の図

さて、「万葉集」に載る磐姫の歌は、卷二・「相聞」の巻頭を飾るものです。

「難波の高津の宮に 天あめの下知らしめす (天下を統べお治めになる) 天皇の代」
「磐姫皇后、天皇を思しのひて作らす歌四首」と題しています。

「君が行き 日け長くなりぬ 山尋ね
迎へか行かむ 待ちにか待たむ 」 (2-85)

(あなたがお出かけになって随分と長い月日が経ちました。山を尋ねて迎えに行ったものでしょうか。それともひたすら待っていらっしゃいますか。)

「かくばかり 恋つつあらずは 高山の
岩根しまきて 死なましものを 」 (2-86)

(こんなにも恋焦がれてばかりいないで、迎えに行って、あの高い山の岩を枕にして死んでしまった方がよかったものを。)

「ありつつも 君をば待たむ うちなびく
我が黒髪に 霜の置くまでに 」 (2-87)

(このままいつまでもあなたを待ちましょう。豊かになびく私の黒髪が白くなるまでも)

「秋の田の 穂の上に霧きらふ 朝霞かすみ
いつへの方に 我が恋止やまむ 」 (2-88)

(秋の田の稲穂の上にかかる朝霧がいつの間にか消えていくように、いつかどこかへ私の恋は消えていくものなのではないでしょうか。)

これらの歌は、愛する夫君の長期間の不在を、嘆き、悩み、諦め心を吐露するなど、思慕の情に溢れたものです。「仁徳天皇と皇后の物語」の磐姫からは想像できない純情で可憐な皇后がイメージされる「歌」ではあります。

歌の作者は不明です。三首目までの歌には、古歌に類似の歌があり、その歌をもとに官人の誰かが詠んだものであろうと言われます。そこに、四首目の歌を加えて“慕わしい天皇を待つ皇后の歌”として、情緒ある一連の組歌にしたのは、飛鳥・藤原朝第一の宮廷歌人・柿本人麻呂ではないかとも言われます。

(参考資料: 伊藤博「萬葉集・釋注」)

「歌」は、官人をして、遠方への長期間の出張中に自分を待ち焦がれて詠んだに違いないと思わせるもので、それ故、官人たちに好まれたと思われま。

そしてまた、「難波天皇の妹、大和にいます皇兄(仁徳帝)に奉る歌一首」として、八田皇女の歌が、卷四・「相聞」の巻頭にあります。

「一日ひとひこそ 人も待ちよき 長き日を
かく待たゆれば 有りかつましじ 」 (4-484)

(一日くらいなら人を待つのもたやすいことです。しかし長い間こんなに待たされた

のでは、とても生きていられない気持ちです。)

この歌は、先の磐姫の歌に感動した誰かが、そう言えば八田皇女こそ妃になるべく長い年月を待ち続けていたのではないかと、詠み加えたものと見られています。万葉集の相聞歌には、「恋とは、待つこと」と捉えている歌が数多くあります。また、「嫉妬は、愛情の裏返し」とも考えていたようです。

万葉時代の人たちは、遠い昔の皇后の物語を、当世風の恋歌に作り替え、歌い合っていて楽しんでいたのだと思います。しかし、伝承され記述された物語とは全く異なる皇后像を表す「歌」を詠んでいます。そのことに違和感を覚えて、その訳を考えて見ました。

7世紀も後期に入ると、ヤマト政権による全国支配が行き渡り、天皇を頂点とする律令制の国家体制を整えていきます。同時に、天皇による支配の正統性を示す必要から、「国祖神話・建国神話」(天孫降臨、神武東征など)などの「国家神話」を整え、広める制度をも作ります。天皇は、“高天原たかまのはらより降り来て、天の下知らしめす(「歌」の題詞を参照)大君”と見なされます。天皇を崇める歌が作られ、公的な歌や挽歌はもとより、叙景的な歌においても、天皇が統治する国土を讃美する詞を詠み込むようになります。

そうした中で、「気性が激しく自分の意思を通す皇后、困惑して慌てる天皇」そんな仁徳天皇夫妻の逸話をテーマにして、歌を詠んで宮廷で披露する、そんなことが許される余地は無くなったのだと思われます。

「歌」は、官人たちの“願望上の女性”が詠んだものと言え、その女性に、仁徳皇后の名前を借りたものに過ぎないとも言えます。しかし、名を借りることによって、遠い昔まだ国家と天皇の地位が盤石で無かった時代の宮廷に、想いを巡らすことができます。そうすることは、こうして大勢で「歌」を享受する現今の宮廷を、讃えることに繋がると認識されていた、と考えました。

磐姫皇后の故郷 奈良県御所市

後ろの山並みが、

金剛山

葛城山



(古墳 Wiki より)

手前が、室むろ宮山古墳(5C初頭・前方後円墳) 葛城襲津彦の墓と言われる